

ナゴヤ子ども応援会議

日時：平成30年11月13日

午後2時50分～午後4時30分

場所：名古屋市立大学 さくら講堂

(事務局)

ただいまより、ナゴヤ子ども応援会議を始めたいと思います。

はじめに、ナゴヤ子ども応援会議の主宰者であります河村市長よりご挨拶申し上げます。

(河村たかし名古屋市長)

はい、それでは品のない男が出て参りましたけども、ようおいでいただきまして、これ言っておかないかんのだけど、実は日本で一番給料が安い市長というのは、これはね、実は今のね、木村先生のああいう趣向にやっぱ微妙に通じるものがある。実はこういうのは。微妙に奥深くて、一人ひとりが愛していく話になる。そういうことですけど、わしも若作りしとるけど、はや70になりまして、とにかく、あとはガキッチョがみんな立派になること。それぞれがね、それぞれの人生で。もうほかは無いです。あとは、八事の煙になるだけです。それを名古屋でやっついこうということで、財政危機というのはあれ嘘ですから。特に名古屋においては。皆様の力じゃないけど。はっきり言えば、トヨタ自動車の力を半分借りましてですね、ものすごい、税金の上納率は日本一ですから。名古屋の皆様が払っとる税金の7割は使われておりませんので、上納しておる。第2位は川崎の62パーセントですから、名古屋7割ということですから、この子どもさんを皆で応援することについては、教育という名前じゃなくて、何遍もいっとるけど、福沢諭吉も教育という言い方はいかん言っとる。鞭でしばくという意味がありますので。やっぱり、エデュケーションと。みんなで応援してあげると。一人ひとりの人生を。まあ最後のカズキ君だったかね。良かったわねあれ。僕はあそこでどうやって、問題を就労の方に仕事の方に結局人間は、やっぱり教育、学校も大きいけど、最後どういう職に就くかがある程度決定的ですので、これは。そこでうまいこといくかなあと、といたら、やっぱちょっと言ってくれたもんね先生がですね。教師になるあるいは、ネイバ

一という近所で生きてくと。ということに繋がっていったのでええんですけど。まあ、そういうようなことも含めまして、あの今でも、スクールカウンセラーのことでは、これ圧倒的に名古屋が日本をリードしておりますんで、これは文部科学省がはっきり言ってますけど、僕に言ってましたから、かの有名な、前川事務次官が、横に座った時に、スクールカウンセラーでは名古屋は圧倒的といったかどうか覚えておりませんが、フロントランナーで立派なものですわ、とそう言ってました。そういうことですから。今度は教育というか、その本体の方ですね。今まではどっちか言うと、ちょっと苦しんどると言うか、不自由なというか。こちらの方に熱を入れてきましたけど、やっぱり学校の何を教えて、どういうふうに子どもさんを応援してくか、本体の活動で、また、本読んどるなわしも、飲んどるばっかでないでこれ。木村先生のビデオも全部見ましたし、やっぱ1人の子も死なせない名古屋というか。あとそれぞれ人生精一杯生きてってまうと立派になるよと。そういう展開をしますので、それはまた後でやりますけども。とりあえず、三味線の中村さん。ミスターナカムラですか。豊正中学の3年生。全国1位になった。それではオープニングをやってもらいましょう。なんかその時には弦が切れたらしい。弦が切れたけど日本一になったという。これは有名なバイオリニストの五嶋みどりだったかな。バイオリン演奏中に弦が切れたけど、という有名なストーリーがあります。まあ、そういうことをごさいまして、ぜひお聞きください。エンジョイ、サンキューベリーマッチ。

～三味線演奏～

(河村市長)

パワーポイントがあるみたいなので、それを見ていただいてから。

(事務局)

それでは、事務局の方から、ナゴヤ子ども応援会議について、ご説明させていただきます。

ナゴヤ子ども応援会議は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」に基づき、市長が主宰する会議であり、市長と教育委員会が本市の教育について、施策の方向性を共有し、ともに推進していくための会議でもあります。この会

議で、名古屋市における教育・学術・文化の振興に関する総合的な施策の大綱であるナゴヤ子ども応援大綱を決めております。

ナゴヤ子ども応援大綱に基づく施策の現状についてご説明いたします。ナゴヤ子ども応援大綱は、法律により全ての地方公共団体の首長が定めることとされた「地域の教育、学術、文化の振興に関する総合的な施策の大綱」として、本市においては、平成27年5月24日に策定しました。この大綱では「日本で1番子どもを応援するまち ナゴヤ」の実現をキャッチフレーズに、4つの柱を設け、本市の目指すべき教育の方向性を示しており、市長と教育委員会は、ともに大綱を尊重して、それを実現するために努力していきます。それでは、この大綱の4つの柱について、ご説明いたします。

大綱の第一の柱は「教育をエデュケーションへ」です。これは、エデュケーションの語源、「外に引き出す」の精神のもと、子どもが考え、自ら学ぶ授業を推し進め、子どもたちの「生きる力を引き出す」ことを目指しています。

大綱の第二の柱は、「なごやっ子の育ちと針路を応援する仕組みを確立」です。これは、多様化・複雑化する子どもの悩みの解決から将来の針路の応援まで、子どもたちの人生を丸ごと応援するものです。この方針の達成のため、日本初の常勤の専門家チーム「なごや子ども応援委員会」を設置し、その充実を進めています。なごや子ども応援委員会では、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、スクールアドバイザー、スクールポリスの4職種の職員が、学校と協働して活動し、専門的見地から子どもたちが抱える問題の未然防止や早期発見、個別支援を行っています。

大綱の第三の柱は、「歴史や文化を大切に作る心を育み、世界にはばたく力を育成」です。これは、郷土の歴史や文化に誇りを持ち、自らのアイデンティティを持ってグローバル社会で活躍できる人材を育成しようとするものです。

教育委員会では、名古屋の子どもたちが地元の歴史を知ることによって郷土愛を育み、名古屋に、より誇りと愛着を持ってもらうため、今年4月に郷土の歴史を学ぶ副読本「ナゴヤ歴史探検」を作成しました。この本は、市立中学校の生徒全員に配布し、授業などで活用しているほか、一般の方にも親しんでいただける内容となっており、書店での一般販売も行っております。

大綱の最後の柱は、「名古屋市教育振興基本計画の重点的取組事項を力強く推進」です。これは、この大綱の理念を具体的に実現していくため、本市の教育分野全般に関する具体的・体系的な事業を定めた計画の着実な実施を図るも

のです。現在の名古屋市教育振興基本計画は、学校教育を始め、教育環境の整備や教員の資質向上、家庭・地域との連携や生涯を通じた学びなど、本市の多岐にわたる教育の施策に関する基本的な計画として策定されています。この計画は、今年度までの計画となっており、現在新しい計画づくりを進めています。

次に、本日のテーマであります「なごやっ子」の育ちと針路を応援する仕組みについて、名古屋市の取組状況をご説明させていただきます。まず、なごや子ども応援委員会についてです。スクールカウンセラーを始め4職種がブロック内の学校からの要請に応じた訪問対応等を行っており、4職種すべて配置された中学校が11校あり、スクールカウンセラーが配置された中学校が73校あります。来年度には全ての中学校にスクールカウンセラーの配置が出来る予定となっております。また、現在、名古屋市立大学と連携して順次スクールカウンセラーの養成を進めております。

次に、ナゴヤ子ども・親総合支援についてです。名古屋市では、子どもの将来の針路を応援する取り組みを関係各局が連携して取り組むため「ナゴヤ子ども・親総合支援推進調整会議」が今年の1月に立ち上がりました。この会議は、さまざまな悩みや心配を抱える子どもや保護者に寄り添って総合的に支援し、子どもの目の前の進路にとどまらず将来の針路を応援するため、副市長をトップに子ども青少年局、市民経済局、健康福祉局、教育委員会事務局の関係職員で協議し、局横断的に取り組みを進めるものです。今年度教育委員会では、子どもたち一人ひとりの発達の過程を支援するため、キャリア支援モデル事業を開始し、その中で周囲の大人が子どもの主体性を重視し、子ども中心の発想になるため、市立大学と連携して「なごや版キャリア支援」の構築に着手いたしましたほか、子ども青少年局では、子どもの権利の侵害に関して、公平・中立かつ専門的な立場から権利救済や制度改善を図る、子どもの権利擁護機関の開設準備を行うなど、全市を挙げて子どもと親を総合的に支援できるよう取り組んでいます。

次に、なごや版キャリア支援について紹介いたします。教育委員会では、「開発的支援」、「予防的支援」、「治療的支援」という観点で子どもと親を応援する「なごや版キャリア支援」を市立大学と協力して、構築したいと考えております。ここでは特に「開発的支援」と「予防的支援」について、ご説明します。「開発的支援」とは、それぞれの子どもの発達によって捉える支援であります。また、「予防的支援」ですが、「予防」とは国民の心身の健康を保

つためにアメリカ連邦国家が採択した考え方であり、アメリカのスクールカウンセラーや学校もこの考え方に基づき活動を行っているものです。困難が起きることを予防する第1次予防、困難が出る兆候がある場合、深刻な問題に発展しないよう早期に対応する第2次予防、困難が起きてしまった場合、その困難が悪化したり、拡散したり、再発しないようにする第3次予防、こうした考え方を踏まえながら「なごや版キャリア支援」を構築したいと考えております。

最後に、現在検討を進めています第3期の名古屋市教育振興基本計画について説明させていただきます。本市では、平成19年3月に教育に関する初めての中期計画である「なごやっ子教育推進計画」を策定して以降、「夢に向かって人生をきり拓くなごやっ子の育成」を基本理念としながら、計画的な教育行政の推進に努めてきました。第3期の計画は、平成31年3月の策定に向け、現在検討を進めています。なお、計画期間は2019年4月から2024年3月までの5年間の予定です。

名古屋市教育振興基本計画は、教育基本法に基づく教育の振興のための施策に関する基本的な計画であり、市長が定める、教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱である「ナゴヤ子ども応援大綱」を尊重し、名古屋市の次期総合計画と整合性をとりながら、策定していきたいと考えています。

第3期計画の基本理念を「夢に向かって人生をきり拓くなごやっ子の育成」とし、「なごやが大好きでなごやをもっとよくしたいと望んでいる」など、5つの資質を持つ「なごやっ子」の育成を進めます。

最後に、第3期計画の計画策定にあたっては、次の3つを重視すべき視点としています。視点1「人生（ライフキャリア）の支援」。視点2「質の高い学びの促進」。視点3「多様な主体との連携・協力」。この3つの視点を大切に、施策や事業を進めることで、「夢に向かって人生をきり拓くなごやっ子の育成」を目指したいと考えています

以上で、説明を終わります。

(河村市長)

それでは、パネリストの皆様は、壇上にあがってちょうだい。

～パネリスト登壇～

(河村市長)

はい、それでは、パネリストをそれぞれ、紹介させていただきますが、ご来場の方はなんで河村がごちゃごちゃやっとなんかと言われるか分かりませんが、先ほど紹介に出てきましたように、これは法律上ですね、市長が招集し、また主宰、主宰ってどう書いてあったか忘れましたが、やるということになっております。これはなんでかいうと、教育委員会というものは、もともとアメリカのモノマネですけど、アメリカは選挙しとるんですよ、実は、教育委員の方なんかは。だから民主主義的な根拠を持つとるんですよやっぱり、それぞれが。だけど、日本は選挙やらずにまったく別個のなんか、独立行政機関みたいななったりしますんで、色々批判もあるとこなんです。だけどみんなほとんど言うなりですけど、私の場合はこれあの、役所が持ってきたやつは、全部アウトにしております、やっぱり、自分でちゃんと考えて、と言っても、相談はしておりますけど、そういうことをやっております、そういう趣旨で、民主主義的な根拠を有するですね、選挙をしとるということです。やっぱり、市長が主宰することをやるべきだというのがその趣旨でございます。そんなことで、勝手にやっとなんかではありませんので、ご理解をお願いしたいと思います。それではご紹介をいたします。

先ほどご講演しました、木村泰子先生でございます。大阪の言葉でやられるとなかなか人情味があってええねやっぱり。本当に。

それから、教育長の杉崎正美さんでございます。

(杉崎正美教育長)

よろしく申し上げます。

(河村市長)

教育委員の小栗成男さんでございます。

(小栗成男委員)

はい、よろしく申し上げます。

(河村市長)

企業経営者さんでございまして、従来型のそういう教育候の人ばっかではや
っております。

それから教育委員の船津静代さんでございまして。

(船津静代委員)

よろしく申し上げます。

(河村市長)

名古屋大学学生相談総合センター就職相談部門准教授でございまして。

それから、教育委員の梶田知さんでございまして。

(梶田知委員)

よろしく申し上げます。

(河村市長)

梶田さんも企業経営者でございまして。純生速達だったか？なんだったかあれ？
速達生だ。トラックによろ書いてあるあの会社の経営者でございまして。

それから、教育委員の小嶋雅代さんでございまして。

(小嶋雅代委員)

よろしく申し上げます。

(河村市長)

名古屋市立大学医学部の准教授でございまして。

それから教育委員の西淵茂男さんでございまして。

(西淵茂男委員)

よろしく申し上げます。

(河村市長)

愛知教育大学理事・副学長ということで。前は役人の中におりましたけども、また戻ってきたと。ウェルカムバックということでございます。

最後は名古屋市立大学副学長の伊藤恭彦先生でございます。

(伊藤恭彦名古屋市立大学副学長)

よろしくお願いいたします。

(河村市長)

今日のパネルディスカッションではなごやっ子の育ちと針路を応援していくために何が必要かを話し合いたいと考えております。話し合いの最後には、ナゴヤ子ども応援大綱について必要な改正を提案したいと思っておりますので、パネリストの皆さんからも積極的なご意見をいただきたいと思っております。

みんなの学校の感想と市長の考えを話してください、と5分程度で発言をお願いしますと書いてありますんで。あの先生の完全に見ましたけど、やっぱあれなかなか温かい、日本の教育これもね、本当にちゃんと調べたんですけど、儒教がいい悪いは別として、評価は別として、やっぱり、儒教ですね。日本のやつは。儒教の最高道徳は、親に孝の孝を大事にしろと。なんか皆さん勝手に私も中学なんかでいうと、中学校の担任が教え子を教え子と言うでしょ。なんで私、知らん間に子どもになったんだと、思っと思ったんですよこれ。誰が勝手に子どもだ、言うんだ。やっぱりですね、子どもだと親がおりまして、儒教の最高道徳は親を敬えということで。この間、読みました本の「公教育をゼロから考えよう」という、リヒテルズ直子さん、オランダのあれですけどね。それと、苫野さん。この本は非常にええということでちゃんと読みましたけども。やっぱり先生のね、見とりますと一人ひとり大事にしとる。とにかく。従来の教育というのはこの本に書いてありますけど、画一斉教育ということです。画一斉教育。先生が黒板かホワイトボードの前に立って、ずらっと並べてですね、とにかく、これを覚えよと。ほんだで、テストがあるぞと、内申点があるぞとお前たちと。こういうやつを、画一斉教育。もうこれを脱却せないかと、書いてあります。じゃあ何かと言ったら、やっぱり個別で、個別だ言うて完全に個人になって孤立しちゃいますんで、個別だけど、やっぱり協同してやっっていこうと。まあそういう考え方が書いてあります。これイエナプランと

いうオランダの。今、YouTubeにも出てきますんで、ぜひ見ていただきますと、イエナプランと。リヒテルズ直子さん出てきますけども。そういう印象で、やっぱ、一人ひとりの人生を応援しているこうということですか、これどうも。人生を。それはね、キリスト教といいますか、ここには All men are created equal. 一番基本的な思想です。すべて神の下に平等であると。したがって、一人ひとりを徹底的に応援するんだという思考なんでないか、と私は今のところ思っております。儒教はやっぱり秩序を守れと。お前たちは。庶民は庶民。士農工商で税金で食つとる皆さんは立派だと。税金を払つとる庶民みたいなものは一番最後の商だと、という考え方がありますね。だから、それで平和になったというんだけど。木村先生そんなような個人を大事にすると、いう考えで、そういうことでええですね？

(木村泰子大阪市立大空小学校初代校長)

要は一人の子が、目の前の一人の子が安心して自分らしく学んでいるかどうか、この事実があるかどうか。私たちのやることって、なんか、どんな、例えばイエナプラン。私も直子さんと対談をして、私は対談をする中で、いいものはいい、おかしいことはおかしい。それだけやったって、イエナプランを持ってきて、はい、日本、イエナプランをやりなさいって。それはイエナプランが目的。そこはちゃうやろって思うんですね。いいものはいいいんですよ、確かにね。だから、画一的なものを脱却して、多様な学びをどう実現するかっていったら、学校の教室の中に、子どもたちの学び場の中に多様な空気があれば、まずは多様な学力を子どもは確保するんですよ。多様なものって何っていうと、自分と違う他者がどれだけいて、当たり前か、何かそれが今、迷惑な子になってしまって、外されていくんですけど、子どもに迷惑な子なんて一人もいないので、困ってる子がいる。この状況にいる自分。なんかこの多様な教師以外の色んな、例えば、河村市長がビヤッと教室に来られて、お前ら何困つとるんやとか言いながら、横にひゅつと。この多様な空気があれば、まずはゼロベースから人の考えを持てるだろうと思います。

(河村市長)

はい。また後で時間があるようでございます。一応シナリオもありますんで、内容はまったく強制されたもの言う必要ありませんよ。なんのためにやつとる

んだということになる。そういうことでございますので、じゃあ今言ったような、抜本的でええんです。革命的なことをやらないかん。これは、思いますね、名古屋の教育においては。お金がないという話にすぐ他の市町村でいきますと帰着します。一人ひとりのことやっていこうという、教師がたくさんいるじゃないか、ということになるんですけど。この本によりますと違うんだと。仲間でやるから、上級生が教師みたいになるんだと。そういう書き方してあるけど。そういう方法等によってもいいですが、根本的な今までのエデュケーション、教育の問題も含めて、まず、保護者代表、お母さん。小嶋委員から発言をお願いいたします。

(小嶋委員)

はい。保護者代表の小嶋でございます。わたくし、今日会場になっております名古屋市立大学の教員もしておりますが、家庭では中学生の娘と大学生の息子がおりまして、保護者代表ということでこの教育委員を拝命しております。昨年は尾木ママ、一昨年は齋藤孝先生をお呼びしてこの会があったんですが、今日、本当にナマ木村先生にお会いできた、お話を聞いた、っていうのは、なんだか一番うれしく、感銘を受けております。何が一番感銘を受けているかといいますと、この大空小学校では先生方が本当に地域の方と一体となって、地域の子どもを支えるということが実現されていることに深く感銘を受けました。映画も拝見したんですが、その中で木村先生が、「うちの保護者の中に運動会の感想文で自分の子どものことだけ書いてくる親はもういません」という風におっしゃってたんですね。そういった意識を学校が、地域の方と一緒に育んでいるということにとっても私は感動しています。名古屋市でも多くの目で子どもたちを見守ろう、ということで、河村市長の強い思いから、2014年に子ども応援委員会というものが設置されているんですけども、今後一層、社会の少子高齢化、核家族化が益々進んでいく中、色々な問題が多く生じ、学校が地域と一緒にみんな子どもを見守り、支援する体制というのが不可欠であるという風に思います。例えば、本当に例えばですが、名古屋市には1万人の教員がいるんですが、その半分の5,000人の名古屋市民がなんらかの形で学校と関わって子どもたちの学校生活を応援しようっていうことになったら、素晴らしいことになるのではないかなあ、と思います。地域には様々なスキル、専門的知識や経験を持った方がおりますが、もちろん、そういう方はもちろん

ですが、どなたでもその学校に関わりたいという気持ちがあれば、活躍する場はたくさんあると思うんですね。学習支援や部活動をはじめとして色々な形で、市民の方が学校と関わっていただけたら、活気のある魅力的な名古屋になるのではないかと。私、健康が実は専門でして、今WHOをはじめとして、国際的に社会的な、社会とのつながり、地域との絆、地域の信頼感というものが実は人の健康にとっても深く関わっているということが分かって、注目を集めています。学校を中心に子どもたちの支援というものを通して、地域の絆が深まっていったら、私たちはみんな笑顔になり、さらに健康な街にもなって、もう言うことない、素晴らしい名古屋になるのではないかとというふうに期待しています。以上です。

(河村市長)

はい、ありがとうございます。それでは、小栗委員さんお願いします。

(小栗委員)

はい。木村先生ありがとうございました。私、日頃は企業経営をさせていただいておりました、分野は違うんですけど、とても考えさせられたな、という風に思いました。事前にビデオなんかも拝見させていただいたり、色々情報も見させていただいて、もう一度この場所でああやってカズキ君の姿というか彼をケアしていかれるような姿を見るっていうのは、とても企業経営においても、勉強になることが多かったなっていう風に感じておりました。私は企業経営ということで、グローバリゼーションっていうことをひとつテーマにこの教育委員会で学ばさせていただいているっていうこともお話しをさせていただきたいと思います。河村市長、非常に色々発言が、いい発言、悪い発言、よくありますけど、本当に教育に熱心にされています。なかなかこういう機会がないので、私から申し上げたいと思いますが、子ども、その教育、その鞭の話もありますけども、いろんな場に出ていただいて、我々ともコミュニケーション、ディスカッションを非常に多く持っていておられますので、河村市長、色々良い、悪いはあると思いますが、本当に熱心に我々と協力的にやっただいていてということは、まずお礼を申し上げて、皆様にお伝えしたいという風に思います。

(河村市長)

ありがとうございます。初めてだわ。

(小栗委員)

そういうことで私の話は以上で。

私は郷土愛ということで、先ほど紹介がありました名古屋探検、これが、非常に今売れておりまして、もうひとつは是非皆さん読んでいただきたいなということと、それから、来年の7月にですね、グローバルエデュケーションセンターというものが開設される予定になっております。今日、木村先生の話の中で私が響いたことが2つワードが、あえて2つというふうにこう絞って申し上げますと、「それ普通やない」という、その「普通やない」というこの普通という言葉がこの日本の教育の中である意味の価値観で統一されてしまっている。その日本っていうある意味閉鎖的な環境で育ってきて、市長も今おっしゃったその儒教とキリスト教というあれは別にしまして、どうしても日本の教育はこうじゃなきゃいけないっていうのが、どうもアタッシュケースのようにですね、その枠の中に入れられ過ぎてしまっている。そういったことをこのグローバルエデュケーションセンターができてくるときに、先生の言葉を引用すればですね、普通ということが、逆にそれは今グローバルの中ではですね、普通ではない。日本だけは普通と思ってるんだけど、世界の中では通用しないということが色々あると思います。そういったことを是非今度グローバルの教育の中で、指導されていくようになるといいな、ということと、それから「風呂敷」という言葉が非常に響いたんですが、なんでもかんでも詰め込まなきゃいけないと。一方的な教育ではなくて、もしこぼれたんだったら、風呂敷で拾ってきゃええやん、そういうような話がありまして、その、拾ってきゃええやんという話が、例えばカズキ君が靴下が白なんだけど、白ちゃうやん、というふうに決めつけるような、教育ではいけないかなと。どんどんどん拾えるような風呂敷、アタッシュケースではなくて、日本古来の風呂敷的なこういったことうまくですね、教育の中に入れながらエデュケーション、そのグローバルな皆さん若い人たちが育っていくように名古屋市がなっていくといいなということを書いて、私の発言とさせていただきたいと思います。

(河村市長)

はい、ありがとうございます。では船津委員さんお願いします。

(船津委員)

船津です。よろしく申し上げます。木村先生本当にありがとうございます。私は涙もろいので、はじめに映画を拝見したときも結構号泣し、今日もですね、涙をこらえながら、ということで、たぶん会場のみなさんもそうだったんじゃないか、と流しておりました。今日の先生のお話を聞いて、一番思ったことは、大人の育ちっていうか先生方自身が、その私の中で一番印象的だったのは先生方が、優秀って言われる先生とか子どものことを考えられて、集まれた先生が今までのやり方ではあかん、という風に気づかれて、それをみんなで話し合っ、そこでいろんなことを話し合いながら、新しい子どもたちのために何をしたらいいか、子どもたちっていう主語をもって、変わられていく、というところがやっぱり素晴らしいな、と思いました。木村先生自身がすごいご苦労もされているけれども、上から目線で大変恐縮ですが、一番特訓されているというか、一番育てられるという感じがして、それがどうしたらできるのかなって思ったときに、それぞれが自分で考えるってということと、さっきの話でいうと多様になっていくことに気づくなんか心の柔らかさみたいなものを持つことが大事だなと思いました。先生になられるっていう始めのところは、皆さん志をもって子どもを育てていきたいと思っても、やっぱり教授するっていう形でいろんなことを学んでこられると、そこにはルールがあったりする。大人になってくると、この大綱なんかもそうかもしれませんが、やっぱりルールがあることは、みんなに公平性も持っていて大変いいことではあるんですけども、ルールに乗っかるそのルールはそもそも誰が、作ってるのていうところに立ち返って、自分で考えていく人たちがいるってことが大事だなって思って、DVD拝見したときに若い先生がすごい苦労されてるところで、木村先生がその先生にいろんな話をしながら最後に先生がご自身で気づかれて、子どもたちと関わられていかれたところが、すごい感激しました。今たぶんこの会場に教育の現場だったりとか、親御さんだったりとか、目の前に子どもがいらっしやる方がたくさんいらっしやると思うんですけども、たぶん気持ちと一緒にじゃないかなと思ったのは先生のお話を聞きながら、今日最後まで先生から搾り取ったお話を聞きたいと思ひながら、少しでも早く現場に帰って、目の前にいる子どもたち

とか、自分が対応する人に会いたいなっという気持ちになりました。自分も大学で就職の相談をしていて、大学生なんか就職なんか相談あんまりないでしょ、と言われるんですけども、私たちそれを相談力って呼んでいて、相談できるってことは大事だと思っているんです。そのためには相談できるように子どもたちがなっていくことが大事なんですけど、その相談できる環境を作ってあげることすごく大事で、そのためにはさっきお話しました大人が、柔らかくて自分で考えて、木村先生が仰る自分が子どもから学ぶ、ということが大事だになっていうふうに感じています。名古屋市も子ども応援委員会、さっき小嶋委員のお話もありましたけども、今年度各小学校、中学校で子ども応援委員会で対応しました相談件数が16,580件とういことで、過去最多となっております。それだけ大変なのかということですけど、この中で、先生自身の相談が8,600件、子どもが9,500件、親御さんが6,800件、ということで、相談できているってことじゃないかな。自分のことを言葉にして人に話して、その対応する人たちが信頼感を持ってその人のことを一緒に解決していく、ということが根付き始めていることがとても大事な、という風に思いましたので、この名古屋市の取り組みを通して、河村市長がよく言われるところで言うと、子どもが自分で話して人に相談できるという、そういう子どもたちが育って行って、それを見守る先生や地域の人たちが柔らかい気持ちと自分で考える力を持っていれば、自分たちが変わっていくと、それは100歳までの人生のこれからも楽しい人生になっていくと思うんですよ。子どもたちから学ばせてもらって、それが地域に根差して、地域が変わっていけば、予算はたくさんおありになるかもしれませんが、そんなに予算を使わなくても、地域が変わっていくというのが学校からできるんだなっていうのを、今日の木村先生のお話を聞きながら、期待感を持って今ここに座っているという感じでございます。以上です。

(河村市長)

はい、ありがとうございます。それでは梶田委員お願いいたします。

(梶田委員)

梶田でございます。木村先生、本当に素晴らしいお話ありがとうございました。この、カズキ君の話を聞いておまして、本当に先生の果たす役割という

のは非常に大きいなど。同時に、地域のサポーターの方たちの役割も本当に大きくて、先生方と地域が一体となって子どもを育てていくと。学校だけではやはり先ほどの先生のお話ではありませんが、24時間見守っていただけるわけではない。たかだか、学校にいるときだけ。やっぱり地域の果たす役割が大きいかなということを感じています。

それについてちょっと、多様な主体との連携についてお話をしたいと思います。この話は市長との意見の交換会で、市長にはお話をしたことなのですが、ほとんどの方は初めてのお話だと思うんで、ちょっと聞いていただきたいです。

先日も、北区のわいわい子ども食堂に行って見学をしてまいりました。そうしましたら、本当に小学校高学年かなと思われる女の子が、玉ねぎを1個袋に入れて持ってきて、入口のボランティアで食事を作ってくれる方に「これ使ってください」って言って持ってきたんですね。それを渡したかと思うと、みなさん、ボランティアの方々がもう何人も、「〇〇ちゃん、ありがとうね」って声をかけるんです。そしてその子が一目散に18歳の女の子のところに行きました。で、かばんからいろんな資料をたくさん取り出して、一生懸命相談してるんです。子ども食堂の方に聞いたら、その女の子、実は、子ども食堂もう3年やっているんですが、最初るときからずっと毎回毎回その子ども食堂に来ていたんだそうです。この4月卒業して、通信大学を受講していると。経済的な理由で普通の大学には行けないもんですから。私はその3年間、高校生としてここの食堂に来て、本当にみなさんに見守ってもらえた。今、自分はそれを恩返しをしたいと言って、小学校の子の相談にのってやってるんですね。子ども食堂は、決して貧しい子のために食事を提供する場、もちろん、始まりはそうだったんですが、実は、月に1回開かれておるんですが、月に1回やったからといって、決して恵まれない子どもの食事が満たされるわけではないんです。その子ども食堂に来てもらって、そして子どもたちと仲良くなって、そして地域のボランティアの方々と顔見知りになって仲良くなって、そして普段町で会ったときに声をかけられる、「〇〇ちゃん、大丈夫。元気。今日は何があったの。」って言ってあげられる環境を作っていこうということです。

私実は、ロータリークラブという、経営者の集まりですが、多分河村市長はあんまり好きな団体ではないかもしれませんが、ロータリークラブに所属しておりまして、この話を聞いて、今度来年の7月21日、名古屋市内に子ども食堂は37か所あると聞いております。この子ども食堂を、少なくとも30は子

ども食堂を吹上ホールに集めて、大子ども食堂フェスティバルを開催しようと。「私の子どもから私たちの子どもへ。どんな子どもでも夢に挑戦できる社会を。」ということで、子ども食堂と夢挑戦フェスタと名打って開催しようという風に思っております。3ゾーンに分けまして、子ども食堂ゾーンと、学びと遊びのゾーン、そして夢挑戦ゾーンということで、ロータリークラブを挙げて、140名のメンバーがおりますが、挙げてやろうと思っております。

ロータリークラブのメンバー、ほとんどが企業経営者なんですが、この話をするですとですね、目を輝かせるんです。ある、水処理浄化槽や水処理プラントを作っておる会社の社長がですね、「じゃあ、その夢挑戦フェスタで、汚い、濁った汚い水を浄化する機械を持ってきて、どんな仕組みできれいな透き通った水になるのかを子どもたちに教えてやって、いつか海外の水に恵まれない国にこの機械を提供して、たくさん子どもたちを救いましょうよ」という子どもたちに投げかけをしたい、ということでですね、本当に今この話を持ち出して1か月2か月なんです、話すたびにみんな経営者の方々が協力してくれるんです。おそらく、そのフェスティバルに、できれば2,000人くらいの保護者、子ども、それから2,000人くらいのボランティアを集めて開催したいなど。

何が言いたかったかと言いますとですね、こうして、私も教育委員をさせていただいて初めて、子どもを取り巻く厳しい環境に向き合えた。他の、まだまだこんな子どもたちの環境を知らない人たちがいっぱいいるんです。特に、会社の経営者って恵まれています。特にそういう人たちは、先ほどの明るい方から暗い方は見えないという木村先生の話じゃないですが、そういうことを啓発することによって、きっと、子どもたちを見守り、そして夢に挑戦するような動機付け、志す人たちがいっぱい増えるのではないかなという風に思います。ぜひですね、全市を挙げて、こんな機会を提供できる場を名古屋市の方々に作っていただきたいなという風に思っております。以上です。

(河村市長)

はい、ありがとうございます。

明るい方から暗い方は見えないというのは、先生も言われたけど、なかなかこれ、意味深というか、大変なテーマですけどねこれ。実は、自由主義社会に対してね。

じゃあ西淵委員、お願いします。

(西淵委員)

それではお願いいたします。木村先生、本当にありがとうございました。友人を通して前々からラブコールを送ってございまして、やっと今日お会いできたということで、本当にうれしく思っております。私も実は24年間教員をやってきました。このドキュメンタリーに出てくる子が、「あ、僕が関わったあの子だ」とか、「ああいう子もいたな」とか、「ああいう関わりしたかな、俺」「もっとこういう関わりすれば良かったな」とそういうことが本当に実感を伴って理解できるということだったんですね。で、ぜひお会いしたいなという風に思いました。おそらく、学校の先生方、名古屋市と限定してもいいですけども、多かれ少なかれ、ああいう子たちを、いろんな子たちを抱えて日々、本当にジャージで泥まみれになって、よだれ垂らす子を、よだれを一緒にすすりながら、がんばってみえるということは間違いないと思うんです。この中にも、先生らしき、思しき方も来てみえますけれども、おそらく、そういう風にやってみると私は思っています。市長は、どうもよっぽど、画一的な先生に指導された、かどうかわからないんですけども、どうも、そこんところが教員というのはみんなそう、上から目線で、画一的だと思ってみえる。と、自分では言ってみえますけど、最後の方にちよろっと私に、「いや俺も先生嫌いじゃないんだよ」と、というようなことも言ってくれましたので、実はだんだん現状を理解していただいているなど私は思っていますし、これからこういう実践をどんどん見せていただいて、それが学校現場行っても、本当に私の学校もドキュメントにして欲しいって言えば同じようなドキュメントが撮れるような学校がたくさんあるんじゃないかなと思うものですから、そういう現場も、学校現場も見ていただきたいと、ぜひお願いをしておきたいという風に思っております。

やはり私からは、簡単に3点。やはり、木村先生の学校も、みんなでやっているとはいえ、学級数に応じてやっぱり定員、教員は配置されている。これは間違いないです。大阪市が大空小学校だけ特別に配置しとるわけじゃないものですから。人の使い方は校長先生の運営次第ですけども、定数は変わってないですね、他のところと。いかに有効に勤務させるかなんですけれども、名古屋市も、小1、小2、それから中学校1年生と少人数学級を実施してきましたけれども、ぜひ、次期の計画では、いろんな人的配置も含めて、本体の教員の

人的配置というのをやっぱりやらないかんと思っています。やらないと、イエナプランは個別だから人はいらんっていうんですけど、40人満タンにおるところで、個別協同というのを実施していこうと思うのは非常に難しい。やはり環境的にも、教室の環境も変えないかん。そういう基盤的整備を、きちっと市長がやっていただくということをぜひお願いをしたいという風に思います。

それからもうひとつですね、私が教育委員会におるときにお願いしておきながら実現しなかったことに、ICTの基盤整備っていうのがあります。これ、エビデンスを出しなさいということで、なかなか難しい。予算的にも大変なので、ということは分かるんですけども、もう今エビデンスを言っとる時代じゃないですね。ICT環境においては。配備率っていうのは非常に低いんです。愛知県名古屋は。これでなんで子どもを応援する市だって言えるんですか。これは言えないと思う。ぜひですね、このところは、目を開いていかないといけないという風に思っています。

それから3つ目は、やっぱり学ばせないかんですね。教員なり、カウンセラーなりも、しっかりと学びつづけていかないといけない、という風に思いますので、求められれば、海外にでも出す、オランダにも行ってもらう、それから大学でも出す、ということで、外の風を当てて研修をしていただく環境を整えていただきたい。いま西郷どんやっていますけれども、薩摩は明治維新のときに外国へ薩摩のお金で20人の学生を派遣したんですね。そのために、新しい改革っていうのに芽が開いてきたわけです。やはり現実的に、新しい教育、そういうものにチャレンジするなら、その場を現場をしっかりと見ないといけないという風に私は思っております。以上でございます。

(河村市長)

はい、ありがとうございました。

河村さんは中学校時代になんか変なトラウマに囚われとったんじゃないかと。ないわけじゃなけどね。いばつとるもんが嫌いなもんでね。単純にいばつとるやつには反発するんです。何言つとるって言って。なんで突然子どもになったんだって。教え子って。まあそういう話もありましたけど、仲のええ人はええですよ。いうことでございます。

教育委員さんの話を聞きましたので、次は名市大の伊藤副学長にお願いいたします。

(伊藤副学長)

木村先生、今日はありがとうございました。

実はですね、私ちょうど2年くらい前にここの会場で、「みんなの学校」の上映会を地域の人たちと一緒にやりました。ここの前のスペースが非常に好評です、この舞台からちょっと距離があるので、ここにたくさんの方が入っていただいてここをインクルーシブな部屋だねと。エレベーターは狭いから問題だけれどと叱られましたけど、そういう意味で非常にいいところだったなと思い、その中で私、ちょうどですね、大学でも障害者差別解消法なんかが入ってきて、どういう風に仕組みを作っていったらいいのかなと、学生教育支援担当の副学長なものですから悩んでいたところですね、みんな委員会を作ろうとか仕組みを作ろうという話から入ったんですけれども、ちょっと違うんじゃないのかなって違和感があって、そのときこの先生の映画を見させていただいて、やっぱり個人を大切にしながら、困難を抱える学生との対話の中からやっていかないといけない。決して障害があるなしではなくて、その学生の個性なんだっていうところから入ろうっていう風に、そんな気持ちにさせていただきました。その後なかなか大学の中での障害者支援、必ずしもうまくいっていないんですけど、とにかくインクルーシブな大学を作りたいということで、今がんばっています。今日またその決意を新たにさせていただきました。

さて、今日なぜ教育委員会の委員のみなさんの中に名市大の副学長が座っているのか。多分、教育委員のみなさまの前で決意表明をしろという、こういう仕掛けだと思うんですけれども。実は私の大学、隣にある病院がすごく有名なんですけれども、この間ですね、名古屋の子どもたちとどう向き合うのかっていうことでがんばってみました。ちょっと自慢させてください。ここにその責任者がいますけれども、夏休みにですね、児童養護施設で暮らす子どもたちが大学へ遊びに来ます。そして、その子どもたちに夢を持ってもらうための支援をやっています。そして、学生たちが学習支援をしたりしながらですね、困難を抱える子どもたちと向き合う、そういう学生になってもらいたい、そういう大学になりたいということでスタートしました。そういう営みが評価されてですね、先ほど紹介がございましたけれども、スクールカウンセラーの養成、子ども応援委員会のためのスクールカウンセラーの養成のための大学院の講座を作っていただきました。そして、病院ではもちろん、発達障害とかそういう子

どもたちの医学的な研究を進めておりますが、同時に、病院だけではない文系学部ではですね、スクールカウンセラーの養成、次はなごや版キャリア教育の下支えをするためにですね、大学の中にチームインクルージョンという専門家のチームを作りました。このチームインクルージョンに教育委員会と連携をしながらですね、名古屋のキャリア支援を支えるですね、そういう教育ビジョンを作っていく、そういう大学になっていきたいという風に思っています。そしてビジョンを作るということで、今日木村先生の話もそうなんですけどやはりですね、一人ひとりの生きている子どもたち、そしてその子どもたちと向き合う大学生、その一人ひとりを大切にするようなですね、そういう大学になることが、多分私たちの使命なんだろうという風に思っております。

同時にですね、学校と地域という話がありましたけれども、私たちは学校が変わる、地域が変わるということで、地域の問題もきちんと向き合っていくということで、この5月にですね、これも名古屋市のご理解をいただいて、大学の中に都市政策研究センターというのを作りました。で、地域が抱える問題っていうのが子どもが抱える問題である、子どもが抱える問題は地域の問題であるということで、名古屋市が抱える問題を包括的に研究しながらその中で子どもたちを支えていく、そういう形の研究活動を通じてですね、名古屋市の子どもたち、しっかり支える。がんばって勉強して最後は名市大。愛教大や名古屋大学にも行っていただいて全然かまわないんですけども、がんばって勉強して最後は名市大に来ていただくという、こういうですね、大学になっていきたいという風に思っていますので、そういう意味でその決意をみんなの前で述べて私はもう逃れることができないという立場に追い込まれるっていうのが今日の多分シナリオだと思っておりますので、そういう観点でですね、市民のみなさまに愛される、そして子ども達に愛される大学になっていきたいと思っておりますので、今日の木村先生のお話をきっかけにですね、がんばっていききたいと思っております。引き続きご支援をお願いしたいと思います。

(河村市長)

はい、ありがとうございます。

まあ今言いましたスクールカウンセラー専用の養成は19人でしたかね、今年。大学院で。名市大でやっていただいておりますけれど、とにかくアメリカだとだいたい、広い意味でですけど学校の中いわゆる教科を教える先生は

半分と、あと半分おりますんで。名古屋だと1万人なのか5,000人なのか分かりませんが、あとぎょうさんやってもらわないかんもんで、100人ぐらいやってちょ一言って、予算要求しやあ言っとるんですわ、ずっと。こんなことに金を惜しんじゃいけませんよ、ほんとにこれは。やっぱり今の色んな、先生とかもそうだけど、やっぱりこれコンピューターという別個の装置が必要ですけど、人間一人ずつ応援していくのはね、これは一人ずつの人間がやらなんでしょうもならんということです、これ。とにかく人間を養成せないかんですよこれは。大至急。ということでございまして、それは前から思っとるんだ、30人学級だけ言っとるでしょう。今までは某政党にありましたけど。やっぱりこれは今言ったキャリアカウンセラーとかスクールカウンセラーとか、教育そのものを画一教育から転換していくと。そういうこともセットでやってくれと、それは増やす意味も分かるんだけど。なんかよお。まあええわ。そういうことがありますので、今の話を聞かれまして木村先生からも一言お願いしたいと思います。

(木村大空小学校初代校長)

名古屋の住人ではない大阪の私は、この中で何を語ればというのが今の本心なんですが、でもこれだけ一生懸命子どものことを考えて応援しようということを、実現しようとする、どう行動すればいいかというこの対話の中におれるっていう幸せを今すごく感じながらみなさんのお話を聞いていました。

改めて自分の中で、やっぱり一番ぶれたらあかんところはここやなって再確認して学ばせていただいたのは、すべてはやっぱり目的ですよ。なんのためにイエナを入れる、なんのために地域に開く、なんのために多様な学びが必要なんだ、全てはこの目的。この目的を、名古屋の子どもの周りの大人がみんな、このためにこの応援団はあんねんでという、この目的を全員が自分の言葉で語れるぐらい、目的を明確にまずは持つということが。手段は、ここにいてくださるみなさん方のそれぞれの手段でその目的を達成しようと思っただけでいるわけですから、家にいて、私はなんにもできひんねんで、って、なんにもできひん一人の高齢者やで、っていうじいちゃんばあちゃんが、名古屋の子ども応援委員会、目的は何って言ったときに、目的はこんなことでこれがあるんやなって言ってもらったら、水まいてるときに「困ったことないか」って声もかけてくれると思うんですね。この目的を、見える形で共有するっていうのは

とても大きいと思います。大空は、目的はたったひとつやったんですね。それは、すべての子どもの学習権を保障する学校を作る。これはパブリックの目的だと思うんですが、この目的を達成するにはどんな手段でもOK。教員は、職員は、自分の母ちゃん、父ちゃんは、友達のプロテクトは、地域住民は、外部の人は。すべての大人が、一括りで言えば、子どもの前の大人、このすべての大人が、この目的を共有していれば、手段はどんな手段でもOK。そこから出てきたのは、大空はいろんな人がピンポンって入ってきます。ここでこれやってみんなで思ったのは、人と人の関係をどう作るかですね。人なんです。校長であれ、教頭であれ、教員であれ。今日はソーシャルワーカーの方とか専門家の方がいらっしゃると思うんですけど、私たち、大空でいつも言っていたのは、教員やりたかったらまず自分が社会人か、社会人である前に子どもの前では大人やんな、大人の前に子どもの前では一人の人やんな。教員やりたかったら、一人の人として子どもと対等な関係で学び合っている自分があるか。これがなかったら教員なんか絶対できひんで。私は校長というポジションでいたので、自分が校長やりたかったら、校長である前に教員。あんたはいつも教員か、って。いつも教員の自分で学校におるか。もっと言えば、一人の人として子どもと向き合ってるか、って。これをいつもみんなでするって大事にしてたんですね。だから、例えば専門家を増やせば子どもは幸せになるかっていうと、そんな簡単なことで幸せにはならないと思います。その専門家がどういう人であるのか、その人が自分という人となりは、この子は信用して「木村きーん」っていうけど、その子は「いやー、木村嫌やな」って、これが、それぞれ違う、自分を持った子どもたちなんですよ。だから、「俺、木村でいけるで」っていうのはつながるけど、「木村嫌やな」って思ったら、じゃあ「あ、この人がいい、この人がいい」、そういう対象が、様々なジャンルで子どもの授業の中にいつもいたら、子どもは最終的に、知識やスキルの前に、大人ってええなって、大人に憧れを持ってくれるなって。私ら、最終目標にしてたのは、いい教員ってなんやろっていう前に、大人として、一番子どもと関わっている時間が長いねんから、こんな大人になりたいな、って大人として憧れてもらえる大人に自分になれるかなって。それは、いいかっこの自分じゃなくって、できひん、あかんかった、失敗した、やり直すわ、ごめんって、ありのままの一人の人として、学校でも向き合っているかって。そうなるってるとね、学びって楽しいなって、すごい感じるようになったんですよ。教員、教えたらあかんで、でももしなに

かひとつ教えろって言われたら、子ども達に、学びって楽しいでって、私ら見てみて、毎日笑ってるでって。学びは楽しいでっていうことを教えられる教員にはなりたいなと思ってたんですが、思ってるだけで。決めんのは子どもなので。

ギブアンドテイクの関係を全部断捨離しました。教員と子どもの関係も、保護者と学校の関係も、地域住民と学校の関係も、ギブアンドテイクは、やってあげます、やってください、してあげました、この必ず合意があります。そうじゃなくて、win-win です。あなたにとってもいいけど、私にとってええねん。学校にとってもええけど、地域にとってもええねん。保護者に、家庭にとってもええねん。自分にとっていいねんでって、最終は、自分にとっていいことは、人は途切れなくシームレスな関係を作って進化継続するなって。こんな感じを今思いながら学ばせていただいていたいました。ありがとうございます。

(河村市長)

はい、ありがとうございます。

やっぱり目的が重要なんだわねこれ。今までの、みなさん学んでこられたというか、儒教的な画一斉教育、それをですね、仮に変えるとしたらですね、それはwillがないといかん。will to change、なぜやるんだということが大変必要ですねやっぱり。これは何かというと、これは難しいとこ入っていくんですこうなってくと。私は南無阿弥陀仏ですけれども、やっぱりね、これはキリスト教の方から来てますので、こういう考え方は。一人ひとりを大事にしようという。all men、men じゃなしに women もありますけど、are created equal、全員神の下にに平等なんだと。体の不自由な子もそうじゃない子も、金のある子もそうでない子も、これはですね、それぞれの人生を同じように徹底的に応援することが、人間の価値なんだと、生きていく。子どもの。自分が生きている。ということだと思いますよ私は。だからそういう気で、南無阿弥陀仏だでそこは誤解されると困るけど、やっぱりそういう欧米人の思考というのは、そういうことがあるんじゃないかなと思いますね。

ということでございまして、次はそれでは人格、識見ともに大変優れた教育長に。と言って選びますので。

(杉崎教育長)

ものすごいしゃべりにくい状況になってしまっただけなんですけれども、教育委員、名古屋市は私含め6人おるんですけども本当に今お話を聞いていただいたとおり、それぞれ素晴らしい個性と素晴らしい考え方を持った方々で楽しく一丸となってやっています。また今日は本当に木村先生においでいただいて、僕も教育長になったばかりの頃に一度名古屋でお会いしたときに、本当に素晴らしい方だなどと思って。ただ、こういう考えとかこういう先生が変わってしまうとまた元の学校といいますか、普通に今日本中である、市長がいうところの儒教的な教え子は机に座ってきちっと手を膝に置いて聞くっていう、そういう学校に変わっていったらうんじやないかっていう恐れもあって、ちょっと木村先生に聞きたいのは、大阪市の他の市立の小学校はどうなんだろうとかですかね、そういうことはちょっと気になるんですけども。今日色々お聞きして、私ども、市長の下で新しい計画を作っていくわけですけども、さっき先生の話聞いたときに一番印象に残ったのは、カズキ君ですね、カズキ君が、さっき市長も言っていましたけどこの会社に就職したんで終わるかなと思ったら、教員になりたいということだったと思います。これ非常にすごいことだなどと思って、教員はじめ地域の方が自分を支えてくれたからその恩返しをしたいということなんですけど。私の話で恐縮なんですけど、私も中学生のときにすごい感銘を受けた先生から、色々話を聞いた中で今でも、まあこういう公務員になったっていうのはひとつそのこともあるんですけど。内村鑑三っていう明治の思想家がいるんですけども、その明治の思想家が明治時代に、講演会で話した言葉を本にした「後世への最大遺物」という本があるんですね。薄っぺらい本なんですけど。そこに、どういう人生を歩むかということはずっと問うんですけども、最後は、自分で高尚な人生を歩んで自分でようがんばったなということなんですけども、もうひとつ先にあって、後輩とか教え子の子どもたちとかが、先生のようになりたいとか、あんたみたいな人になりたいって言うことが僕は一番の遺すことだと思ってまして、そういう意味じゃ、カズキ君が木村先生とかいろんな地域の方を見て、自分が先生になりたいと言ったのは本当に素晴らしいことで、そういう素晴らしいことをしていただいたというか、実践した木村先生は本当にすごいなっていう風にいつも思っていて。これは今日の約束なのかもしれませんが、だいたいこういう講演会とかシンポジウムをやると、その扉を出た瞬間に「今日は良かったな」で終わっちゃうんですね。

なんだったかなというのをみんな忘れちゃうんですけども、やっぱり今日のこの話を、目的をきちっと腹に落としてですね、みなさんがこのあと実践していただきたり、僕たちも今日の話を腹に落として、すべて仕組みじゃなくって、すべてやることはすべて腹に落として、目的を腹に落としてやらないと、いくら金かけても意味がないので、そういうところをしっかりと腹に落として今日は帰りたいなという風にと思っております。本当に今日はありがとうございました。ってことで、ちょっとまとめっぽくなるんですけど、市長、じゃあお返しします。

(河村市長)

はい。ありがとうございました。大綱を作ることになっている。法律でなっていて、市長が教育委員とよく相談して、市長が作れとなっていますわね、これ。これに基づいて、教育、Education をやっていくとなっていますので、その改正といいますか、私も正直言いまして、専修のスクールカウンセラー、専門職のおるとは知らなかった。正直に言っています。知らなんだと。ロサンゼルスに行って、びっくりこいた。やっぱり、子どもがあの時、2人名古屋で亡くなりまして、自殺だったんですけど。原因は、いじめでした。当時はいじめの方に相当関心が行っていたんですけど。ロサンゼルスの教育委員、向こうの教育委員です。女の人ですけど、話を聞きまして。私たちは数学の授業は苦手ですと。だけど、数学の先生は、私たちの仕事は苦手なんですと。だけど、私たちと数学の先生たちは対等なんですと。こういう風に言われたのが、びっくりこいた。びっくりこいたという所を、誰か褒めてくれないかんで、これ、本当に。やっぱりプロとして、プロとして私も長くやっていますので、びっくりこいた。日本のスクールカウンセラーさんはたくさんおみえになりますけど、みんな非常勤でですね、学校の教師と対等とはありえませんが。日本だと。学校というのは教師支配なんであって、えーということで、それから調べかけて、こうなってきた。ずばりいいますと、初めの予算をつける時に、3億円、役所反対だったんですよ、これ。30人から始めようと。どうやってやるんだということで。ちょうど、今、そこに座ってますけど、高原さん。アメリカのケンタッキーのレイビルで10年間スクールカウンセラーをやった人で、博士課程もとっておられまして、その人に来てもらったので、色々とやれたんだけど。試行錯誤しながら、とにかくやるよりしょうがないと。子どもさんが2人も自

殺した時にですね、何の案もないじゃないかと教育から。本当に。あんまり言う
と、西淵、あれが悪いかも分かんけど。私は言いましたよ。何も無いとい
うことはないんじゃないかと。本当に。とにかく、初めは3億円は皆反対だっ
たんです。最後は市長は予算調製権を持っていますので、これは3億計上する
と。嫌なら出て行ってくれと。それでスタートしていった。それが今、125
人までいきました。子どもさんの面倒を見た人数と7,200人ですよ。もの
すごいですよ。少なくとも7,200人の子どもさんを勇気づけてきた、とい
うことは確かです。だけど、それでも死にますからね。今年でも。3人亡くな
りましたね、分かっているだけでも。女の子ですけど、中学生。ということだ
で、その他にもまだあると言われていています。ということでございますので、大
綱改正の柱としては、「子どもを1人も死なせない」と。そういう名古屋。こ
れは、相当強い意思表示で。わし、はっきり言うと報告に来るんですわ、市長
室に。この度、どこどこ中学で亡くなったと。その時に、I'm sorry. がありま
せん。すいません、というのが。本当に。よそ事なんだもん。数字を言うてく
るだけで。ちょっと待てよ。あんたらの仕事じゃないのか、本当は。それはや
っぱり、謝らないかんですよ。これ。そういう心を変えないかん、先生方の。
木村先生の話じゃないけど、意思がないといかんですよ。意思が。というこ
とで、それを強く言うため、言うためでもないけど、現実には子どもを1人も死な
せない。となると、相当予防的にもやらないかんですからね。これ。例えば転
校してきた子どもなんかだったら、転校したという事実だけで、1人ずつきち
んと個人的にケアせなあかん。そういうこともやっていくとということ。各
種予算については責任を持ってつけますので、これは。そういう事を言ったら、
怒ってちょうだいよ。特に財政がアホな事を言ったら。何を言っているんだ、
と言って、という話ですから、そういう所は心配しんでください。それから今
言った姿勢だと、今、途中で出てきましたけれど、開発的支援、
developmental approach というんですけど、それから予防的支援、
preventional approach。それから治療的支援と、きちんと概念を分けて、治
療的支援というのは、すなわち、例えば、苦しんでいる子どもさん達ですね、
色々。それから予防というのは、今言った、例えば、転校した子どもだっ
たりとか、親が離婚した子どもだとか、そういう段階からもアプローチしてい
く。それから、開発的支援というのは、それに関わらず、一人ひとりの子ども
の人生を全般的に応援していくという意味です。概念をちゃんと分けて進める

と。それから学校にキャリアの専門家を置かないということで、先ほど木村さんに言ったけど、本当にカズキ君、ああいう風になったで、大変良かったですけど、最後皆さん学校の中で努力されるけど、それは非常に重要なんだけど、最後に社会に出て働くというところが、決定的に意味が大きいですよ。僕も色々なおっかさんと喋っている時に、子どもの色々な不自由な事で、発達障害とか、何とかです、将来をはかなんじゃうんですよね、これ。この子はちゃんと仕事に就けるんだらうかということで、死んじゃう。ということが現にありましたので、数年前に名古屋で。ということでございますので、アメリカの制度を見ますと、やっぱり学校の中に、小学校ぐらいからですよ、専門職です、ちゃんと、常勤の。だから、大きくなったら何になるの？と、あんたは何が好きなのと、というところから、世の中にはどういう職業があると、その辺らしいですよ、小学生。小さい時からやらないかん。中学校ぐらいになると、そのためにはどういう会社があるか。高校、大学になると、いわゆる就労支援という感じで近づいてきますけど、そういうのを小学校ぐらいから。これも大変ですよ。こういう人、いないですから、日本では。養成せな、ならんです。ということから、取り組んでいくと。

それから、名古屋の郷土愛を大きく育てるということですが、この席で、今日はかなりやる気のある人が多いと思いますので、年内にですね、一遍集まってもらいますように呼びかけます。これ、どうやってやったら今の個別教育がもっと広がっていくようになるかということ。こないだ、苦野さんか、「公教育をイチから考えよう」を書いた人に来てもらって、どうだと聞いて、モデル学校でやろうかと聞いたら、ダメだと言っていました。やっぱり、今の木村さんの言うように、意思のある人が集まらないかんということでございますので、一遍、その講師かなんかは、みんな色々な所から来ていただいて、みんなやりますと言っていたので、名古屋市の教員1万人おりますけど、そこに教育委員会にやれやれと言っておいてもやれへんのですわ、これ。本当に。目に見えているもん、わし、悪いけれど。顔に書いてあるで。ほんだで、教育委員会がやるならいいですよ。やらない場合は市長部局ですね、1万人の皆さんにまず、とにかく一遍集まってくれと。教育の根本を変えていくんだと。一人ひとりの支援という方向にね。ということで集まって頂いて、その人を中心にして、ちょこっとでも広げていくという方向でやりますので、またご案内が行くと思いますので、ぜひ参加を頂きたいということでございます。

今、高原さんとちょっとそこで出口で、話し合っていたけど、フィンランドに見学に行って来たら、フィンランドは学校の校舎がそれぞれ違うと言っていました。日本の場合は校舎みんな同じなので、本当に。どうも、相当、根本的に思想が違うと思いますね。画一的にやっていくという思想と。今のところ、そんなん、河村、面倒くさいで、と言って。企業戦士を作るために優秀な奴をちゃんと画一的に産んでいくんだと。それで、塾で徹底的にやって、それで落ちこぼれた分はしょうがないんだと、それは。という考え方ですね。戦争に負けたからしょうがないかもしれないけれど、まあそろそろ変わらないかん。根本が。そのために、精一杯やるというところでございます。

(河村市長)

改正のやつを。

【事務局がパネリストに資料配布】

(河村市長)

直前の所はあるけど、いまだいたい喋ったもので。ちょっと解説を言いますよ。一番上は先ほど言いましたように、子どもを1人も死なせないという風に決断するという。目標か手段か分かりませんが、決断すると。先ほど言いましたように支援の仕方を、開発的支援、予防的支援、治療的支援という、きちっとイメージとしては分けて、重なっていますけど、分けて。特に、とりあえずは予防的支援。相当、熱を入れないかんですよ。1人も死なせないと言うんだったら、ということになります。それからもうちょっと進んで、開発的支援だから、一人ひとりの子どもの人生を、大空小学校みたいに応援していくと。それから、今言った、キャリアの専門家もなるべく小さい時、小学校のうちから導入して、子どもさんに、あの子は教員になると言いましたから良かったですけど、小さい頃から色々な仕事があるぞと言って、体が不自由だけど色々なチャンスがあるぞと、人生には。親が無茶苦茶だけど、本当に色々なチャンスがあるぞ、というようなことを小さいうちから応援していくということだ。何か赤の所は見えませんが。

(杉崎教育長)

赤は消すところですよ。

(河村市長)

赤は消したか。だから変更したところですよ。基本的な所はそう変わっておりませんが、それから後はやっぱり郷土愛。名古屋は道路ばかり作っていたもので、はっきり言って。日本で一番行きたくないマチ、日本一になってしまったがね、これ、本当に。何なんだと。それだけで自動車産業が成長したという人がおりますけれど、関係ないですよ、そんなもん。あれは朝鮮戦争で大量な需要が入り込んだので、関係ないですよ。そういうことでございまして、400年、御三家筆頭だった名古屋。侍のマチですよ。これは。何かで言うと。京都は貴族。大阪はやっぱり、商業というか、ビジネス。名古屋は何だといったら、侍ですよ。侍は嘘を言わないです。本当は。質素だけど、嘘は言わない。本物を作るというのが、トヨタ自動車に繋がっていったと、僕は思っています。だから名古屋のお城だって、図面を残したわけですよ。名古屋城だけ。名古屋城だけしかないですよ。あれ。ああいう図面。本物の図面。国宝1号だと。本物をやっぱり残していく。まあ、色々な福祉の方は、コンペもやりまして、努力しますけどね。そんな精神で名古屋はやっていこうじゃないかということでございまして、教育長さん。

(杉崎教育長)

今、市長さんの方からこういう大綱といいますか、名古屋市の教育の憲法のようなものですが、こういうことでよいかということでご提案がございまして、教育委員会、私を含めて6人おりますけれど、事前に色々と議論もした上でございまして、こういう形でやっていこうと。市長とタッグを組んでやっていこうということで異議はございませんので。

(河村市長)

はい。Thank you, very much. Let's get together. ということで。本当に来てくれている方、河村が偉そうにと思わんようにしてちょうだいよ。法律で市長がこういうことを呼び掛けて決めるんだと、法律で決まりましたので、こないだ。数年前に。そうだろう。

(杉崎教育長)

そうです。

(河村市長)

そうです。はい。ありがとうございました。それでは、皆さん、Let's get together. 異議なしということでございましたので、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づきまして、ナゴヤ子ども応援大綱を案のとおり改正いたします。

それで、最後に今日のパネルディスカッションを振り返り、木村先生から一言、ご発言を賜りたいと存じます。

(木村大空小学校初代校長)

皆さん、ありがとうございました。全ての子どもの学習権を保障する学校を作るというのは儒教でも、キリスト教でもなく、日本の憲法で決められていることなんですね。今、河村市長さんが、市長が偉そうに言っているのとちゃうで、これは法律で決まったんだでとおっしゃったのと同じで、誰一人排除したらあかんで、誰一人もれたらあかんで。インクルージョンというのは、誰一人排除しない、あなたがあなたのままでこころ安心して学ぶ。これが public の学校やでと言うことだけなんですよ。だから、憲法で決められていることを、只々、最低限のことを、周りの大人がどうすればいいかって、みんなで考えていだけで、自分に無理だと思ったら人の力をどんどん活用すれば、あの子ちょっと私無理やねん、交代、バトンタッチとなって。じゃあ、子どもが教員を選べないという、画一的な空気の中から、この子が安心するには、校長の私あかんねん、河村市長行ってや。よっしゃって。そこで子どもが笑って、俺もう1回頑張るわって、前に向く。これが私たちが作る子どもの事実なんです。だから大人がこうやろう、ああやろうじゃなくて、全てはみんなへの、それもしんどい、一番困っている子の事実から、これで良かったかな、どうかなって、常に正解の無い問いを問い続ける。この大人の姿が、誰1人子どもを死なせない。横にオッチャンおるで、横に私おるでと。子どもって一人ぼっちになったら死ぬんですね。それも瞬間に。でもその時に、私おるでって、誰かが横にいたら。この誰かというのが案外、先生とか親じゃないんですね。フラットな、斜めの関係の人なんですよ。そんな風に、はい、思います。本当にこの3年

間、自ら命を絶った子ども達の所に、何人か私は呼んでいただいて、学ばせていただきました。子どもが自ら命を絶つ。子どもの姿が永遠に無くなる。私たち大人のやっていることは何やねんって。教師とか、行政とか、親とか、そんなん越えて、1人も子どもを死なせたらあかんやろ。それが大人の最低限の役割やろって、すごく強く思っています。自分の子が死んだらどうやろうって。私なんか、自分の子がつて考えたら、恐らくここでこんな子どもが死ぬっていう言葉すらも使えないと思うんですね。難しいことなんじゃなくて、やっぱり全て他人事を自分やったら、自分だったらと、自分と取り替えて、なんかそんな大人に変われば、またふっと色んな施策が子どもの事実に戻るんじゃないかなと思いつつ、学ばせていただきました。今日はとても充実した時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

(河村市長)

はい。ありがとうございます。まあそういう精神で、これ。精神じゃなくて、実現していきますので。教員が多分、ようけお見えになると思いますので、ちょっと若干面白い話をしますと、3年、4年前だったかな、僕らの恩師、東区の桜丘中学校で卒業なんですけど、公立のね。そこの同窓会で一杯飲んでいたんですよ。そうしたら前の教師、教員がお見えになって、校長会でお偉い様になった人が「おい、河村。おまえのやっている子ども応援委員会。あんなもの、あかんぞ」と言って、「なんでいのかん」と言ったら、「学校は俺らがやるんだと。教師が。教師以外のが来て、何が出来る。」と言って、「なんだ。教師ってそんなに偉いのか」と言ったら、「馬鹿者」と言ってましたけれど。まあ、一方、そういう考え方もあるんです。しかし、こないだ、名古屋ですけれど、校長会のお偉い様に言ったら、確かに昔はわしら、自分たちで全部やると言われていたけど、それはここが儒教だと言っているんですけれど、言われていたけど、はっきり言って無理だと言っていました。今では。早くいってくれと、それを。無理なら無理と。外部のプロにも来てもらおうし、それから皆さんに、教員の意味、目的意識、これが変わるということが決定的に重要です。やっぱりこれが。先ほど言いましたように、今度集会をやりまして、公募をいたしますので、ぜひこの、ようになると思いますよ、皆さん。やりがいが出てくると思うし、日本中の教育を変えていくといいですか、個人個人を大事にする、柱をそちらの方に持って行く活動でございます。皆さんと一緒に、しっかりや

りましょうということでございます。ということで、最後に教育長となっている。

(杉崎教育長)

最後になりますけど、今日は長時間に渡り本当にありがとうございました。またお忙しい中、木村先生においでいただきまして、ありがとうございました。今日、いま決まりました名古屋の教育の憲法、ナゴヤ子ども応援大綱、この改正内容に基づいて第3次の教育振興基本計画も策定していくことで、やっていきたいと思っております。いずれにしても市長が申しましたように、この考え方が腹に落ちてやらないと、何をやっても成果が出ませんので、ぜひこういうことを腹に据えて、腹に落としてですね、やっていきたいと思っております。長い時間でしたが、ご清聴ありがとうございました。どうもありがとうございました。

(河村市長)

市長の閉会の挨拶になっておりますが、先ほど言いましたので、これでいいと思います。みんなで挑戦していくということです。意思を持って、木村さんの言われる目的を持って、全ての学習権の保障ですか、ちょっと固いけどな、そういうのは。やっぱり、全て、皆平等であるということですわ。色々な環境にある子どもさんも、全員を一人ずつ応援していくというのが人間の務めだということだと思います。ということで、Thank you very much. ありがとうございました。

(事務局)

ご来場のみなさま、壇上の方々に、大きな拍手をお願いいたします。

本日は長時間に渡り、教育シンポジウム、ナゴヤ子ども応援会議にご参加くださいまして、誠にありがとうございました。本日のご感想・お感じになられたことなどは、お手元にお配りしたアンケートにご記入いただき、お帰りの際、係員にお渡しいただければと思います。

以上を持ちまして、教育シンポジウム、ナゴヤ子ども応援会議を閉会させていただきます。